

リカードとジェームズ・ミルの  
経済学と政治論

和田重司

一 まえがき

一、古典派経済学は、政治経済学である点に近代経済学とちがった特質を認められながら、リカードは概して純経済理論家としてのみ取扱われており、その政治経済学的性格と、さらにはリカード段階の政治思想との関連は、ほとんど等閑視されているのが現状である。この小論はリカード段階の経済学と政治論との二つの理論分野の関連を確かめ、その統一的把握に立つてリカード(一七七二—一八二三)及びジェームズ・ミル(一七七三—一八三六)の思想史上の意義をただそうとするものである。

二、リカードとミルはその生涯を産業革命の進行と共に過ぎた理論家・実践家であったが、彼らは産業革命の完成された成果に立って英国の社会機構へ分析のメスを入れたのではなく、その進行の途上で出てきた問題についての分析を行なったのである。彼らがその理論を形成しつつあった段階は、文字通り産業資本確立の過程でしかなく、一方でその成果として経験され

た諸関係のいくつかを理論化することができた反面、なおスミスの(古典派的)ムードを持つことが許された学説史上の過渡的段階であったといえる。リカードによって完成された古典派理論は、すぐさまジェームズ・ミルによって俗流的解体へと継承されたのである。しかしこの皮肉な継承に見られる両者の微妙な異質性の究明は、従来の研究成果にゆだねることにして、ここで私は右の異質性にもかわらざりリカードとミルが社会的実践において共にフィロソフィカル・ラディカルズとしての密接な共同戦線を張りえたのはなぜか、という日頃の私なりの疑問を解きほぐして見たい。

三、主として取扱った論者は、リカード「経済学及び課税の原理」(一八一七)と、ジェームズ・ミル「政府論」(一八二〇)である。

四、さて独立小生産者層の加速度的分解の進行は、資本主義発達史上新しい社会問題を生ぜしめつつあった。

なかでも当時の議論の、したがって新しい社会問題の根底をなすものは、大衆の窮乏化の問題であった。マルサスの「人口論」も、あるいはトマス・スペンス、チャールズ・ホール、コベット、ハントのはげしい資本攻撃(体制批判)も、この事態についての解明の試みであつたらうし、またリカードが経済学の問題を分配論だと規定したのもそれと無縁ではない。

また産業資本確立のロゴスが、生産過程で右のような社会階層の分解を押し進めていた時、同じロゴスは、流通過程では恐慌という分裂的な形で現象した。この問題は事実上右の窮乏化

の問題と表裏の現象として受けとめられていたように見える。ディストレスという当時の言葉が、不況と窮乏の両方の意味に用いられたのは、事態の本質を物語るものであったと言える。にもかかわらずリカード段階において例えば一八一五年の恐慌が過度の恐慌といわれることは、リカード、ミルを学説史的に位置づけるに当って留意すべき点である。

さらに一方では新興産業資本家層の経済的実力の向上と、他方では地主貴族による政治権力の専断とは、右の窮乏化の問題とからみあって、貴族的支配体制批判として現われた。これは第一次議会改革運動として有名であるが、この民主主義運動において重要なのは、資本主義的諸関係の形成・変化・確立の過程が進むに依りて、諸階級の相互的対応関係が漸次変って行ったことである。ミルの「政府論」は一八一六—二〇年に書かれたと言われるが、これが、リカード「原理」とともに、右の変遷の途上で、つまり「労働者階級の思想と組織の種が蒔かれた時期（一八二〇—三〇）」に先だつ、「耐えがたい苦痛に対する盲目的絶望的反抗の季節（一八一五—二〇）」という過渡的の時期に著わされた点は、リカード、ミルの思想上の地位を考へる場合、忘れてならない背景である。

五、リカードとミルは政治的関心に目覚めた新興産業資本家とともに、経済的繁栄の手段として政治改革が必要であることをはっきり意識していたようである。彼らの経済的自由主義と議会改革運動とは、このような形で統一されていたのである。われわれは何よりもこの実践的統一に、経済学と政治学との結

び目を見る視点を、はっきりさせておかねばならない<sup>(6)</sup>。その場合実際的には、経済改革が目的で、政治改革が手段であり、論理的には政治論の基礎に市民社会が前提されているから、まずリカード、ミルの経済把握から検討しなければなるまい。

(1) これに反してジョン・S・ミルは、一八四八年に新時代にふさわしい理論を総合的に書き改めようとして意図した。彼の「経済学原理」第一版序文参照。

(2) 引用は *Essays on Government, Jurisprudence, Liberty of the Press, and Law of Nations. Written for the Supplement to Encyclopaedia Britannica, by J. Mill, 1825?*, London. に依る。詳しい紹介・分析は石上良平「英国社会思想史研究」(一九五八)を参照。

(3) 独立小生産者の没落と、すでに産業資本に包摂されていた労働者の苛酷な労働条件と低賃金との、二層の窮乏化。それ故前者は「昔のよき時代」への郷愁を払いのけなかつたのに反し、後者は産業革命以後の近代的労働者階級の意識を形成する土壌に立つものであった。前者の代表的イデオログとしてコブデン、ホジスキンを、後者についてはオウエン、タムソンを指摘することができる。

(4) コール「イギリス労働運動史」I、林健太郎等訳八九頁。しかし「一八一五年から一八二〇年の間に、騒乱と不満は、社会の全組織を……おびやかすように見えた」し、また一八一九年のピーターラーの虐殺事件を包む同時期を「英国が社会革命にもっとも近づいた時点だとする人々が

ある」ことを留意しなければならぬ。(A. Briggs, Age of Improvement, 1959, London, pp. 207—8)

(5) 議会改革運動をめぐっての三大階級の三つ巴の対抗関係の変遷については、佐藤明「イギリス産業革命の構造」(一九五九)後篇を参照。改革運動を労資が提携して地主に対抗したものとすの昔日の通史とちがって、一八三二年に近づくほど有産階級としての資本家と地主が相談・提携して、労働者の反抗と対決したとする氏の分析は、学説史の研究にとってきわめて重要な示唆を与える。

(6) アレヴィはその有名な著書『The Growth of Philosophical Radicalism, tr. by M. Morris, 1928.』において、約言すれば、経済学＝自然的利害一致の原理、政治学＝人為的利害一致の原理という形で両理論分野の関連を検討し、この矛盾は結局は、「外観的なものにすぎない」(ibid., p. 491)と結論したが、その問題視角自体に形式主義的な食ひ足りなさがある。

## 二 経済的自由主義の構想

一、人口論。通説によればリカードの、したがってジェームズ・ミルの資本蓄積論の基礎前提は、マルサス人口論と収穫逓減の法則である。リカードがこれら二法則を前提したことは、価値論を基軸とする彼の再生産論に一步先んずるもので、それだけに彼の経済学の性格を論ずるにあたっての一つの重要なポイントである。

もともとマルサスの人口論は、まえばきで述べた「窮乏化」を歴史的な基盤とするものであり、労働者の窮乏を社会の所為にしないで、自然の所為にしたという基本的性格をもっていった。いかえればそれは私有財産の批判(あるいは揚棄)が、窮乏を少しも解決しないと論ずることによって、充分発展した私有財産制度(資本主義)を、基本的には肯定したものに他ならない。人口論の前提は、すでに労働者の平等主義的な要求に対する批判でありえたのである。

確認すべき点は第一に、色合の相違はあれおよそ社会主義的な諸思想は、マルサス人口論に対して批判的であった点である。ハズリット(一八〇七)、エンサー(一八一六)、ゴドウィン(一八二〇)を別としても、すでに一八一六年にはオウエンは批判的見解を表明したが、リカード以後の段階においてはすべてのリカード派社会主義者がはげしくマルサス人口論を攻撃するにいたっている。第二にマルサスとリカードとの「ちがい」といえども、それは共通の第一原理(人口論＝引用者)を基礎とした上でのちがいで、<sup>(8)</sup>「でしかなかつた点である。学説史上マルサスとリカードとの対立的側面が強調されるのは勿論正当であるが、徐々に形を整えつつあつた無産者の要求に対決する時、リカードは地主の代弁者マルサスに依存し、両者の間に右のような連帯性があつた点を、ここで確認しておきたい。

二、調和的な資本主義観、産業資本確立過程で生じた第二の新しい事態は、一八一五年に見られる恐慌の問題である。一般的恐慌を否定する点ではジェームズ・ミルがリカードに先んじて

いた。彼はすでに一八〇八年に「商業弁護論」において、セイ法則を採用し、一般的恐慌を否定した。その理論的根拠が、貨幣を単に流通手段と見做し、貨幣に媒介される商品交換を物々交換と同視し、貨幣の機能の分裂の側面を見なかつた点にあるのは、久しく通説のいうとおりである。

それでは貨幣つまり貨幣経済を右のように理解したのはなぜかと設問してみれば、まず重商主義的な貨幣観批判という古典派の学説史上の伝統にその理由を見出しうるが、さらにほりさげて、産業革命という進取的な時期になお彼らがこの伝統に安んじたのはなぜかと設問をくりかえせば、それは、作れば売れるというすぐれて新興産業資本家的な楽観的自信に裏づけられていた、と考えていい。

分業社会、商品交換、貨幣経済についてのこうした彼の楽観的把握は、理論的には一般的過剰生産恐慌が、一時的偶然的なものであり、あるいは戦争終結というような経済外的攪乱作用によるものとする結論を導いた。さきに見たようにリカードは産業資本展開の結果としての窮乏化を自然の責任に転嫁したが、今度は恐慌に現われた同じ問題を再び資本自体のロゴスから取りはずしてしまった上で、産業資本の無制限な蓄積を謳歌するための理論的根拠を得たと信じたのである。これがほかならぬ経済的自由主義の根拠であったのである。

ミルもリカードも政治論を論ずるにあたって、好んでコムニティーなる用語を使ったが、その現実的経済的内容は、右のような調和的な社会観であった点を、一言先廻りして言っ

おこう。

三、階級把握。右の経済的自由主義という政策的帰結を引きだすにあたって、リカードが、賃金利潤相反関係つまり低賃金こそが最大限の資本蓄積の要件であるという、当時の商工業階級の間の常識と主張にうらづけられて、まさにこの観点から資本蓄積の構造を分析しようとしたことは、キャンナンやミークの指摘するところであるが、右の常識や主張はまた豊富な資料によって実証できるであろう。こうした視野の中で形成された彼の再生産論、したがって三大階級の相互的対応関係の把握について、この小論ではさしあたり次の点について論究を試みたいと思う。

リカードの分析の骨子は周知のように、(1)穀物価格が高く(Ⅱ地代が高く)貨幣賃金が高ければ利潤は低い。(2)したがって労働需要は小さく実質賃金を押下げる傾向が生ずる。別の形で言えば、(1)穀物価格が低下して(Ⅱ地代が減少して)、貨幣賃金がさげれば利潤は騰貴する。(2)したがって労働需要は大となり、さしあたり賃金を引上げる傾向が生ずる。——という点にある。前半の論理(1)は、賃金利潤相反論として有名であるが、後半の論理(2)は、労働の市場価格についてはリカードが賃金基金説的な説明を行なっていたことを示している。(1)はリカードが到達した科学的原理として学説史家はそれを称揚する。(2)は、労働の市場価格決定のメカニズムについての説明でしかないといえ、(1)とならんで等しくこの小論で重視したい点である。というのもリカードの

経済理論を生み落したものは、穀物法論争という時論的な問題であつたから。

(1) の論理において地代と貨幣賃金とのバラレルな動きが利潤と逆比例の関係にあると論ずることによって、リカードは賃金利潤の相反関係だけでなく、地代と利潤の対抗的關係を結論した。彼によれば地代は利潤からの再分配分でしかなかつた。しかし(2) の論理において利潤の大小が労働需要を左右し、かなり長期にわたつて実質賃金の動きを左右すると論じて、彼は労働者と資本家との連帯性を強調した。こうして彼は、賃金引下げという資本のロゴスの積極的な本性をいんべいし、それを地主に肩がわりさせ、賃金の実質的引上げ闘争としての労働者階級の反穀物法闘争と、賃金引下げ政策としての資本家階級のそれとの対立的一面を、等閑視しようとするような注意深い理論操作を行なつているのである。これは、当時すでに(バラバラではあつたが)広範になされていた労働者の単なる賃金引上げの要求の可能性を否定する論理に他ならないという一面を秘めていた。

四、さきに人口論について吟味したように、私有財産制の安全を意識する時は、リカードは地主の代弁者マルサスの思想に依拠しながら労働者階級の間の平等主義を批判した。しかし今や、地主と資本家との対抗を意識する場合は、労働者階級との連帯性を強調しながら地主階級の政策(穀物法)を批判した。

(しかもこれはまた、労働者の反資本家的要求を暗黙に否定する論理を含んでいた。) こうした両面批判が同時に両面的依存

を含むところに、リカードの、ひいては当時の新興産業資本家の中間的(中産者的、後論)性格を確かめることができるように思う。

(1) cf. L. Stephen, *The English Utilitarians*, vol. II, James Mill, 1900, p. 239 ff.

(2) cf. R. Owen, *A New View of Society* (Everyman Library) p. 85.

(3) L. Stephen, *ibid.*, p. 238.

(4) 彼らが新式機械の採用を競つたことを想起せよ。

(5) 恐慌については、一方でマルサスが資本の過剰蓄積、地主の不生産的消費不足として、他方で社会主義的論客が分配の不平等の結果として、無制限な資本蓄積に対する両面からの批判があつた点を、論じなければならぬが、この点は指摘することとせぬ。

(6) cf. E. Cannan, *Theories of Production and Distribution*, Third ed. 1917, p. 164.; D. Meek, *Studies in the Labour Theory of Nature* 1956, pp. 89—90.

(7) それ故にさうそく一八二〇—三〇年には「政治家・雇用主及び群小経済学者たちは、(リカード) 経済学によつて低い賃金は鉄則によつて固定されていて、労働組合と立法とは労働階級の状態を改善するためには、共に無力であることを……貧民に証明しようと努力した。」(コール「イギリス労働運動史前掲訳書 I、九六頁。)

## 三 ブルジョア民主主義の構想

一、生産力の最大限の発展の政治的條件の確立。「最大多数の最大幸福」は、ベンサムによれば「人間相互の快樂を最大にし苦痛を最小にする」ことよって達せられる。これはもつとも抽象的に表現された場合の「政府の任務」であり、「目的」であるとミルは言う。ところで最大の快樂を得るには、欲望の対象物をできるだけ多く獲得しなければならぬが、自然はそれをただでは与えてくれないから、そのための労働が必要である。「明らかにこのことが政府の基本的な原因である。」なぜなら自然に存するものが不充分であり、労働なしには欲望が充たされぬ場合には、「紛争と侵害の種が尽きないからである。」

労働、欲望の対象物の獲得、快樂の増進と財産権の安全というきわめてロッキのな内容をベンサムのな論理形式で表現し、そこに政府存立の基本的原因を確めたミルは、さらに進んで政府の任務は、右の内容に立ち入って言えばどんなものでなければならぬかを説明する。

欲望の対象物をできるだけ多く獲得するためには、できるだけ多くの労働が必要である。そのためには労働に最大の利益が伴なうようにしなければならない。そしてこの最大限の利益は、とりもなおさず「労働の全生産物」にほかならない。これが一層詳しく規定された政府の任務である。

ミルの説明を字句どおりにとれば、彼は労働全収益権の政治的保証を言うように見えるが、勿論その内容は、社会主

義者の主張に対比すれば、歴史的時差と階級的偏差を持つものである。ミルの議論は、直接労働のみならず蓄積労働としての資本の要求(利潤)をも包含して正当化しようとした点に、社会主義者たちがったロッキの・スミスの特質がある。つまり彼の主張は、資本家に対する労働者の主張ではなく、特権的不労働所得者としての地主貴族に対する生産的階級の(しかもその場合資本家をも労働者とともに生産的階級に含めることによつて、経済学におけると同じく、労働者との立場の連帯性を強調した)主張であった反面、同時にチャールズ・ホールに代表された労働者の主張を、リカードが人口論を前提した場合と同じようにここでも再び、黙殺という形で消極的に批判するものであった。

こうしてわれわれは、ミルの説明に中産階級の意味での財産権の政治的保証が、社会の最大幸福を確保する手段であり、生産力の最大限の発展を保証する体制であるという認識を見出すことができるが、同時にミルのこのような視角設定には、すでに、リカード経済学におけると同様な両面批判の両面的依存という中産者的な性格が含蓄されていた。

二、土地貴族の政体批判。右の見地から彼は当時の土地貴族的な政治制度を批判した。周知のように、国王、上院、下院によつて構成された英国政治機構は、三政体統合説あるいは均衡説によつて弁護され続けていた。かつてブラックストンがその古典的弁護者であり、ベンサムがこの賛美論の鋭い批判者であったことは有名である。

ミルの反駁の要旨はこうである。国王と貴族は少数者である。彼らは人民と利害が対立するときは、より多くの共通性(特権)によって提携しがちであるが(また実際に提携していたのだが)、こうして彼らが政治を断つ時、最大多数者としての人民の犠牲において彼らは権力をほしいままにするだろうこれは政府の目的に反する。

このようにミルは、国王・貴族と人民との融和しがたい利害の対立を強調した。国王と貴族は明らかに経済学上の地主階級に相当する。リカードは三大階級の経済的相互関係を分析して、地主階級の利害は社会の利害と対立すると断言した。一見形式論理的に見えるミルの帰結が、リカードの経済分析を内容とすることは明らかであり、この点にもリカード、ミルにおける経済論と政治論との反貴族的な同一性を見ることが出来る。

三、中産階級と下層階級。ところでミルが貴族的特権を少数者の利害として攻撃するときには、彼は逆に中産階級と下層階級の連帯性を強調する。そもそもミルのいう「過半数」は、どのような社会階層を含んでいるのか。次のしばしば引用される文章はこの疑問に明確に答えてくれる。

「コムミュニティーの中のもっとも賢明で有徳な部分とされている階級、すなわち中産階級が……全人民中大きな部分を占めていることは議論の余地がない。……この中産階級が代議制の基礎が非常に拡大された場合に、その意見が最終的な決定力をもつことになると思われるところの、コムミュニティーの部分であることは疑いない。彼らの下位にある民衆の中で大部分

のものは、彼らの忠言と模範に必らず導びかれるであろう。」  
 「中産階級は下層の人々とじかに接し合っており、いつも彼らと親密に交際しており、下層の人々は数多くの困難に遭遇するために、中産階級のもとにかけつけて忠言を求める。」ラッダイトの打壊しでさえも、右のミルの議論を「証明するもの」でしかない。なぜなら「工業地帯での時折の騒乱」は、中産階級の欠除<sup>(1)</sup>や「中産階級の有徳な家庭の同情の欠除」によるからである。

この自画自賛的な中産階級礼賛は、「ミルとその仲間の功利主義者の属する社会階層礼賛に対するミル自身の評価と、彼らが人民の天性の指導者であり、助言者であるという彼らの主張を示している」点<sup>(2)</sup>できわめて興味深いし、また、ミルの「論文全体がこのような信念を基礎として成立っている」点<sup>(3)</sup>にも注意しなければならない。しかし私の行論にとっては、パーミンガムのように資本関係の発展の遅れた都市については、あまりえたかどうか疑わしいような形で、中産階級と下層階級との連帯性をミルが強調したのは、彼が地主階級を攻撃するためであったと考えられる点が、重要である。また右の連帯性の強調は、経済学においてリカードが地主批判をする場合に労働者と資本家との連帯性を強調したのと軌を同じうするものである。

四、調和的な社会観。それ故にミルは、人民(または共同体)の中には利害の対立はないと論じた。ミルは言う。  
 「コムミュニティーは自らの利益に反する利益を持つ筈がない。そのようなことがありうると主張するのは、言葉の矛盾で

ある。……これは疑うべからざる命題であり、はなはだ重要な命題である。」<sup>(16)</sup>

リカード及びミルは、まえに述べたように政府存立の原因としての経済社会を分析し、きわめて調和的・樂觀的な社会を構想していた。これはアレヴィによって「自然的利害一致の基本的命題の新しい発展」<sup>(17)</sup>という印象的な言葉で評されるほどのものであった。無制限な資本蓄積に対する樂觀的なリカード・ミルの自信は、今度は、前節で述べた政治的指導階層としての中産階級の称賛、及び右の引用に見られる調和的・社會的に、再び読みとることができる。ここにも彼らの経済理論と政治論との調和主義的な同一性がある。

五、中産階級の代議制。こうした樂觀的な社会把握に立つて、ミルは民主制の線に沿いながら、政府目的達成の方策をうちだすことになった。

ミルの論旨はこうである。人民全体の直接的政治参与は不可能だから、直接的な政治の仕事は若干の人々に委任される他はない。<sup>(18)</sup>しかしこうした人々も権力を手にするや「必ずそれを悪用するきわめて強い動機を有する」<sup>(19)</sup>から、「それを防止するに充分な抑制が必要である。」つまり代議制<sup>リプレゼンテーション</sup>が必要である。そのために、国王貴族に対抗しうるだけの権力を議会に与え、議員の任期を短かくし、選挙権の範囲が広げられねばならない。そもそも、貴族的・特権的選挙制度の民主化が、ミル「政治論」執筆の動機であった。

しかしこの小論で問題にしたいのは、にもかかわらず、彼が

当然のこのように選挙権（拡張）の範囲を制限しようとした点である。まず婦人と四十歳以下の男子が、次に小財産所有者及び無産者が、選挙人名簿から脱落する。財産・所得による制限について、ミルは具体的には何の基準も提案していないが、ペンサムをはじめ功利主義者はこぞって完全な普通選挙には反対だったようであり、例えばリカードは、こうした労働者の普通選挙権の要求を「気遣いざた」<sup>(21)</sup>ときめつけ「極度の嫌悪」<sup>(22)</sup>を感ずると断じ、「選挙権は人民のうち財産権のでんぶくに何の利益をもたないと考えられる人々」<sup>(23)</sup>に限定しなければならぬとし、こうした範囲の人々を「人民のうち合理的にものを考えうる部分」<sup>(24)</sup>（＝中産階級）<sup>(25)</sup>であると見做した。ミルはリカードのこの提案に無条件の賛意を表明していた。<sup>(26)</sup>

さて重要なことは、労働者の側からの私有財産批判に対して、選挙権を制限しようとする点において、程度の差はあったが、マルサスとリカード、ミルの間には、経済学において人口論を前提した場合と全く同じ性質の連帯性があった。例えばリカードは言っている。「範囲のせまい選挙権を要求する方がより慎重である」と、あなた（マルサス）は言われるが、この点私も賛成です。私はまた……（完全な）普通選挙をあえて試みるべきでないとする点でも、あなたに同意します。」<sup>(27)</sup>

六、以上、一方では土地貴族の特権に対するときは労働者階級との連帯性を強調し、他方では労働者の平等主義的要求に対するときは土地貴族の思想に依存しながら、中産階級の財産権を守り、産業資本の無制限な活動の政治制度の上での保証を志

向するものとしてのミルの政治論における、両面批判と両面依存とのかみあいを分析し、いくつかの論点について、リカードとミルの経済学と政治論との思想的同一性を指摘してきた。そこに見られるような、両面的依存と両面批判とを同時に含む思想の矛盾は、およそ各時代に幾度か様相を替えた「中産」階級の思想に不可避な特質であろう。

- (1) J. Mill, *Essays on Government etc.*, p. 4.
- (2) *ibid.*, p. 3.
- (3) (4) *ibid.*, p. 4.
- (5) *cf. ibid.*, pp. 4—5.
- (6) それ故、労働全収益権を「J・ミルは政治論の冒頭で明白なものとして前提した」(L. Stephen, *op. cit.*, p. 214) ところが評価に対しては、言葉の意味内容の歴史的変遷を考慮したのかとどう疑問がもたれる。
- (7) 言葉をかえれば、原初的な労働にもとづく私有財産と資本主義的な私有財産(資本)、労働と労働との交換に對しての資本と労働との交換、ひいては体制原理の相異に導びかるべきこととしたものの区別についての無理解。これはリカード、ミルを含めての当時の歴史観との関連で改めて論じたら問題である。
- (8) J. Mill, *op. cit.*, pp. 15—16. なおリカードもすでに一八一八年に同内容の分析を行なっている。(cf. *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. VII, p. 369.)

- (9) *cf. ibid.*, vol. 1, p. 335.
- (10) J. Mill, *op. cit.*, pp. 31—2.
- (11) *ibid.*, p. 32.
- (12) W・グザヴィヤンソン「イギリス政治思想史」Ⅲ、堀・半田共訳八七頁。
- (13) 石上良平「英国社会思想史研究」(一九五八)一一一頁。
- (14) *cf.* A. Briggs, *Age of Improvement*, pp. 208—9.
- (15) *Community, democracy, people 等*を表現せむべし。
- (16) J. Mill, *op. cit.*, p. 7.
- (17) E. Halévy, *The Growth of Philosophical Radicalism*, tr. by M. Morris 1928, p. 272.
- (18) *cf.* J. Mill, *op. cit.*, p. 6.
- (19) (20) *ibid.*, p. 16.
- (21) (22) Ricardo, *op. cit.*, vol. V, pp. 28—29.
- (23) *ibid.*, vol. p. 370.
- (24) *ibid.*, vol. VII, pp. 320—1.
- (25) (26) (27) (10)に引用したミルの文章を参照。
- (26) *cf. ibid.*, vol. VII, pp. 373—5.
- (27) *ibid.*, vol. VII, p. 270.

四 ち ち

最後に次の点を加え吟味して結びにしたい。以上で見た

ようにリカードとミルは、経済的には資本家階級に、政治的には中産階級に絶大な信頼を寄せている。二つの理論分野でのこれら二様の表現が、歴史的現実的にはどのようにオウバラーブした社会階層であったのかを確認することは、彼らの経済学と政治論との関連を考えるにあたって欠くことのできない一論点であろう。

二、もともと中産階級なる把握と、マルクスに結論的に見られる階級把握とは、およそ方法上異質的である。前者は主として所得の大きさによる階層区別であるが、後者は生産手段の所有関係を基準とする。だから社会学的に見れば、産業革命の途上における中産階級は、大部分の資本家を包含しながらも、それより広い社会層を包むものであった。しかしミルの用語例においてすでにそうだが、新興産業資本家層が中産階級の中核であったとするが通説である。どのような意味で中核なのか。G・D・Hコールは、独立小生産者から成長した産業資本家層の富の増大が、その周辺に自らの必要として諸階層（医者、弁護士、知識人、教師を含む諸職業）を創出・助成し、これらの諸階層を産業資本家層に経済的に依存せしめながら、同時に彼

らの中産階級へと仕立てあげた過程を分析している。<sup>(2)</sup>リカード段階の再生産及び再分配の機構における、このような依存関係こそが、産業資本家階級の主張の社会的通用力の基盤であったと考えてよからう。またそれ故にこそ、経済上の産業資本家の利害を擁立したリカード、ミルが、政治上では、中産階級の代弁者たりえたのだと考えられる。

三、それ故にリカードに代表される経済理論家と、ミルに代表される哲学的政治思想家とが、穀物法撤廃運動と議会改革運動において、フィロソフィカル・ラディカルズとして、共同な実践運動を展開しえたのであろうが、リカード、ミルの経済学と政治論との統一的理解の場もまたここになければなるまい。

(1) ピール家のように、新興産業資本家から上昇して、土地貴族へ融合した層は厚くなかった。

(2) cf. G. D. H. Cole, *The Conception of Middle Classes*, in "Studies in Class Structure," 1955, pp. 78—100.

(一橋大学大学院学生)